慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ルソーと著名性 不幸の著名性 : ルソーと公衆・ 読者
Sub Title	Rousseau et la célébrité La célébrité des malheurs : Rousseau et son public
Author	Antoine, Lilti 井上, 櫻子(Inoue, Sakurako)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.70 (2020. 3) ,p.72- 94
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20200331-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ルソーと著名性
不幸の著名性：ルソーと公衆・読者

アントワーヌ・リルティ

この講演のタイトルは『告白』にみられる次のようなルソー自身の文からとったものです。「地位や出自による著名性は有していないが、よりいっそう私独自のもので、多くの犠牲を払って手に入れた別の著名性を有している。それは不幸の著名性 « la célébrité des malheurs » だ。」この一文は 18 世紀における名声の変容、そして作家がどのようにそれを捉えていたかということを要約した典型例です。個人の評判はもはや階級社会における地位に結び付けられるものでもなければ、出自や家柄によるものでもなく、個人に関わるものとなったのです。ルソーはまさしく、血筋や名誉に基づく伝統的社会から、個人がその伝記（ライフヒストリー）に帰せられる近代的で個人主義的な社会への大きな転換に立ち会った人物なのです。しかしこの著名性は不幸の著名性です。彼自身はその業績、著作よりも、波乱に満ちた人生、彼が受けた迫害、人生において時折経験した失態・挫折によって有名になったと言えるでしょう。このように著名性と不幸とを結びつけるやり方は、もちろん、ルソーの偏執的でメランコリックな気質によるものです。この点については後で触れることにします。このようなやり方に、驚かれるかもしれません。私たちは文学的著名性をどのように成功したかという点に基づいて考えることに慣れているからです。作家は誰しも有名になることを夢見てはいないでしょうか。できるだけ多くの読者の関心を惹きたいと思っていないでしょうか。実際、先のルソーの文は、文学的著名性は、それが西洋の文化に登場した時から本質的に両義的なものであることを示している点で重要だと

言えます。つまり、著名性とは誇りの根拠となるだけでなく、時として苦痛に満ちた試練となるのです。先の表現 « la célébrité des malheurs » は語の順序を逆にすることもできます。ルソーは「不幸の著名性」を有するのみならず、「著名性の不幸」を経験した人、つまり著名性を重荷、呪い、自分に対する公衆の暴力のようなものとして経験した人なのです。

今日皆さんとともに明らかにしたいのは、こうした矛盾です。著名性とは望ましいものなのでしょうか、忌むべきものなのでしょうか。幸福なのでしょうか、不幸なのでしょうか。著名性は啓蒙の時代の文化的変容とどのような関係があるのでしょうか。そのためにはジャン＝ジャック・ルソーの足跡を詳しくたどらなくてはなりません。

まず最初に指摘すべきは、ルソーは当時最も著名な作家だったということです。ルソーがただ非常に有名だったという意味で言っているのではなく――それは誰しも知っていることです――、著名性という経験を社会的・文化的現象として経験した最初の作家だという意味です。今日のメディア社会において私たちが知っているような形の著名性は、20 世紀末に生まれたものでもなければ、ハリウッドのスターとともに誕生したものでもありません。実際、拙著『セレブの誕生』において明らかにしたように、著名性は 18 世紀にまずイギリスの演劇界、音楽界、文学界において、ついでパリで、そして次第に他のヨーロッパの地域において最初の発展を遂げたのです。そしてルソーはヨーロッパで最初の大著名人の一人となりました。新聞には、その日常生活が事細かに語られました。あらゆるサイズ、そしてあらゆる価格の彼の新しい肖像画が定期的に売りに出されました。読者はルソーに手紙を書き送り、彼の著作が自分の人生を変えたこと、そしてさらに深い友愛の念や、ルソーから得た情熱について語りました。野次馬たちはルソーの家を訪れたり、彼を一目見るチャンスを得ようと散歩道で待ったりしました。

このような名声が検討の対象となることは稀です。数々の逸話や引用はルソーの伝記の中でそれほど真剣にとらえるべきではないものとされることがしばしばです。実際、このような著名性は 18 世紀においては全く新しい現

象であったと理解するのが大切です。それまでは、作家は生前、小さなサークルでしか知られていませんでした。つまり、いわゆる「文芸共和国」の他の作家たちの間、あるいはもっとも運のいい者についても貴族のエリートの間あるいは宮廷でしか知られていなかったのです。18 世紀における著名性の文化の発展は、2 つの主要な公共空間の変化と対応しています。1 つは、読者の増大、新たな読書習慣、そしてとりわけ新聞の増大によって印刷物が急増したこと。そしてもう 1 つは、例えば私設劇場の躍進や出版資本主義の誕生とともに文化や余暇が商業化したことです。作家にとって、社会的認知の条件そのものが大幅に変化したのです。それはもはや、文学界や上流社会のサロンにおける評判だけに関わるものではなくなりました。作家は今や、自ら執筆する作品の受け止め手となる公衆、作家とその作品、そしてその人となりに関心を寄せる無名の読者と関わることになったのです。このような関心は伝統的なインテリ層におけるように批判や賞賛に基づくものではなく、好奇心、そして時には真の意味での感情的愛着に基づくものなのです。それが極端な形をとるのが、作家が掻き立てる好奇心が完全にその著作とは切り離され、その人となりや名前に向けられたときです。ルソーの場合は、何年もの国外追放生活ののち、1770 年にパリへ戻ったときにそうしたことが起こりました。グリムの執筆していた文学系の雑誌である『文芸通信』は、ルソーがパリのカフェに登場したときに生じた大騒ぎについて意地悪な皮肉を込めて語っています。

「ルソーはパレ・ロワイヤル広場のカフェ・ド・ラ・レジャンスに何度も現れた。彼が現れると大変な人だがりができた。下層民ですら彼が通りすぎるのを見ようと広場に集まった。こうした下層民の半分に何をしているのかと尋ねると、彼らは『ジャン＝ジャックを見るためだ』と答えた。ジャン＝ジャックとは何者かと尋ねると、全然知らないが、彼が通りすぎるのだ、と答えた。」

ここでは、好奇心はトートロジック（同語反復的）であるように思われます。アメリカのエッセイスト、ダニエル・ブーアスティン［1914–2004］が同時代の著名人をからかうために作った表現を借りるならば、ルソーは「そ

の著名性ゆえに著名」なのです。彼は「ジャン＝ジャック」という名前に単純化されるのですが、その名前は内容をともなわない語、好奇心をそそる光景＝見世物が始まることを告げ、大衆が繰り返す賛同の記号、なかば公開性のスローガンなのです。もちろん、この表現を字義通りに捉えるべきではありません。それは、著名性のメディア的メカニズムに対する批判が18世紀に既に存在していたことを示すものです。フランス語では、先にグリムが用いていた「下層民」という語は、観衆に対する軽蔑の念を示すものです。というのも、彼らは公衆の堕落した姿、おめでたい庶民の群衆であるようにグリムの目には映ったからです。しかし、ルソーその人が掻き立てた好奇心については他にも多くの証言があります。見ず知らずの人がルソーの家に訪ねて行ったり、チェスをするのを見に行ったり、さらに彼に手紙を書いて助言を求めたり、肖像画を求めたりすらしたのです。ルソーの著名性はエリート界に留まらず、広範に広まっていたのです。ダニエル・ロッシュ［1935– フランスの歴史学者］の考察の対象となったガラス張り職人のメネトラは、その回想録で自分がルソーと出会い、カフェまでお供したと語っています。

しかしながら、ルソーの著名性はこのようにいささか皮相的な公衆の好奇心に限定されるものではありません。ルソーに関心を寄せ、彼を一目見たいと思う人々の大半は、彼がどのような人物であるかよく知っていました。彼らはルソーの著作を読んでいました。少なくとも、その幾つかは読んでいました。そして、著者に会いたいと熱望していました。当初は、ルソーの名声は文学的かつ知的なものでした。この名声は、1751年、『学問芸術論』の時期にさかのぼります。この著作は激しい論争を巻き起こし、ルソーが衆人の注目の的となる原因となったものです。この時期、矛盾する見解を雄弁に擁護する「著名なジャン＝ジャック・ルソー」が人の口の端にのぼるようになりました。ルソーは論争好きな性格で人々を魅了し、晩年まで知的アクチュアリティーの中心にあり続けました。そもそも彼自身、挑発の最も正確な意味において自分が話題になるために必要なあらゆることをなし続けたのです。1760年代、フランス、そしてジュネーヴから追放される原因となった『社会契約論』の出版後、ルソーは正真正銘ヨーロッパ規模での著名人となりま

した。1766年、イギリスに滞在したときには、イギリスの新聞は絶えず彼のことを話題にしました。ルソーをロンドンに招いたディヴィッド・ヒュームはルソーに関わるほんの些細なことにも新聞に反響が示されるのに驚くべきか、感嘆すべきかわかりませんでした。ヒュームは少し驚きながらこのように記しています。「どんなにつまらないことでも、ルソーに関わる状況はみな、新聞に公開されるのです。」ルソーの犬がいなくなってしまうと、そのニュースは翌日には報じられました。見つかると、それが新たな記事を出す機会となるのです。ヒュームは数ヶ月後、彼がルソーを怒らせたときに、自ら犠牲を払ってこの著名性の影響を知ることになりました。彼はこの私的な諍いが、すぐに公的な事件となって複数の新聞に解説され、公衆がルソーの味方をするのを見て驚きました。

ルソーはフランスに戻っても強い好奇心を掻き立て続けました。彼はその著名性および著名性の拒絶によって知られていました。彼は自分のことがいつも話題になっていることを願いつつも、同時に自分の身を隠し、訪問客を受けるのを拒む矛盾をはらんだ人物でした。そのせいで、絶えず人々の好奇心が高まったのです。挑発的な作品を発表し、文学界の友人たちと喧嘩することでいつも人々の関心を惹きつけようとしながら、同時に人知れず孤独に生活したいと絶えず主張する著名作家の矛盾を理解する必要があります。

その前に、ルソーの著名性を育んだ2つ目の要因について強調しておかねばなりません。この著名性は雄弁で謎めいた作家への好奇心に基づくだけでなく、1761年に発表された小説『ジュリ、あるいは新エロイーズ』の著者ルソーに対する読者の感情的愛着に基づくものです。この作品は大変な人気を博し、それに伴い、感傷的・感情的な読書の発展に見られるような感受性の大変革が生じました。読者は熱狂し、大いに涙を流し、作家に夢中になって「ジャン＝ジャック」を想像上の友人として手紙を書き送り、すっかり惚れ込んでいつもこの友を弁護しようとしたのです。読者の愛着は「離れているのに親密な関係になりたいとの欲望」によるものですが、この欲望は著名性の特徴的な形態の1つで、とりわけファン――自分たちのアイドルと想像上の感情的関係を結ぶ人々――という現代の現象に見出されます。誇

張ではなく、ルソーには多くの熱狂的なファンがいたと言えます。ロバート・ダーントン［1939– アメリカの文学史家］のおかげで、われわれはジャン・ランソンの手紙を知っています。ランソンとは、ラ・ロシェルのワイン商で、ルソーに一度も会ったことがないのに、いつも彼を「わが友ジャン＝ジャック」と呼び、体調について尋ね、例えば自分の息子をエミールと呼ぶなど、ルソーの教えに自分の生活を合わせようとした人物です。作家の死に際しては、文通相手であるルソーの作品を刊行したスイスの出版業者に次のように書き送りました。「こうして、われわれは崇高なるジャン＝ジャックを失ってしまいました。彼に会ったこともなければ、彼が話すのを聞いたこともないのが悔やまれます。その著作を読んで、彼には特別な尊敬の念を抱いていたのです。いつかエルムノンヴィルの近くを通るときには、彼の墓を訪ね、その上に涙を流さずにはおそらくいられないでしょう。［……］ この著名人について、私がいつもほろりとしてしまうその運命についてどのように考えていらっしゃるか、どうか話してください。」ロバート・ダーントンはこうした振る舞いをあたかも原始的な心性の残滓であるかのように、非合理的でほとんど理解不可能な反応とみなしています。しかしそこにはむしろ、世俗化された著名性の文化の始まりを見出すべきでしょう。有名な作家、ジャン・ランソンの言葉によれば「著名人」は知的な導き手であるのみならず、想像上の友となり、その作家に一度も会ったことのない多くの人々があたかも家族の一員であるかのように、強い感情の絆で結ばれようとするのです。メディア革命は、集団の関心が集中する少数の著名人と公衆との間における新たな関係性の形態を生み出しました。19 世紀にはこの現象は広まっていきます。シャトーブリアン、バイロン、バルザック、あるいはウジェーヌ・シューといった作家たちが、自分たちの生活について語り、助言を求めようとする読者から長い手紙を受け取るようになりました。

ランソンは一度もルソーに直接手紙を書きませんでしたが、多くの読者がこの作家に宛てて手紙を書きました。しかもルソーはその手紙を保管していました。例えばここで思い出されるのが、ある地方の小貴族のことです。彼は毎週返事が来るまでルソーに手紙を書こうと決め、次のように述べました。

「ルソーさんが全く存在しなかったとしたら、何も必要とはしなかったでしょう。しかし彼は存在しています。ですから私には何か欠けていると思うのです。」時計職人ジャン・ロミイについては、何ヶ月もの間、手紙の内容を熟考し、ルソーが自らの日常生活において占める位置について、強迫観念になるほどだと告白しています。「あなたとお話しする機会をこれ以上遅らせることはできません。あなたと交わしたあらゆる理想的な会話についてお伝えしたいと思ってから2年近く、いや3年になります。起きるときも、寝るときも、散歩するときも、あなたはいつも私の心の中にいて、あなたを愛する人々に、あるいはあなたのことを全く好きではない人々に、あなたのことを少し話題にできるときしか、いい仲間といると感じることができないとあなたは知るべきです。」こうした人は、女性にもたくさんいました。あるアンリエットという女性は――身元は全く特定できていないのですが――、生き方についての道徳的助言を求めるべくルソーと文通を始めようとしました。その手紙を読むと、彼女がルソーの言葉遣いをいかに自分のものにしているか、そしてどれほどルソーを信頼しているかということに驚かされます。この著名な作家は好奇心の的であるだけでなく、読者にとって頼みの綱なのです。つまり、助言を求め、生き方の方向性を定め、より良い人生を夢見るために人々が頼る模範なのです。

ルソーが正真正銘のファンになってしまった一部の読者、さらにより広く好奇心の強い公衆に与える魅惑は、その独自性、特異性に依拠するものです。人々が彼に愛着を覚え、その行動を見張るのは、彼が何一つ皆と同じようにはしないからです。ルソーは思いがけない立場を擁護し、同時代人とは全く異なった人生の選択をします。ルソーの公的イメージの特異性を示す一部の要素は、ルソー自身によってはっきり、そして意図的に前面に押し出されています。かくして、ルソーは上流社会の規範と文人の生活様式に異議を申し立てます。彼は国王の年金を受けるのを拒み、写譜の仕事をすることにこだわります。サロンとは距離を置き、簡素でつましい生活を送ることを選びます。それをすぐにはっきりと示しているのが、ローブと毛皮の縁なし帽から成る例のアルメニアの衣服を選んだことです。実用性という観点から選ばれ

たこの衣服は、エリートに対する一種の挑発であり、自分を目立たせる方法でもあったのです。こうした要素は人々を魅惑し、好奇心を掻き立てる公的人物を作りあげます。上流社会の規範との決別を際立たせるために選ばれたこうした要素は、ジャン＝ジャックを永遠の見世物、好奇心と驚きを掻き立てる対象にするのです。ルソーの晩年、パリに立ち寄るヨーロッパの旅行客の大多数は、小さなアパルトマンでつましい暮らしをし、文学的観点からのあらゆる儀礼訪問を大っぴらに拒絶した大作家を訪ねることを義務としました。ジャン＝ジャック訪問は、回想録の不可避の一節、成し遂げるべき一種の偉業となったのです。

彼の著名性を培うのに貢献したルソーの選択がもう1つあります。それは、自らの著作を最も批判的なもの、最も危険なものも含めてすべて自分自身の名を付して公刊するということです。当局に強い衝撃を与える可能性のある書物に関して、18世紀に一般的であった慣行は、匿名で出版する（生涯を通して匿名を守るのに成功したドルバックを思い出しましょう）、あるいは少なくともちょうどヴォルテールが軽快かつ皮肉を込めてそうしたように、体面を保つべく偽名を用いるというものでした。ルソーはといえば、自分の面子にかけてすべての著作に署名しようとしました。『エミール』や『社会契約論』をあえて自らの名を付して刊行したことは、スキャンダルの要因の1つであり、パリ高等法院の厳しい態度と身柄拘束令を説明付ける理由の1つでした。しかしルソーにとって、それは政治的な振る舞いでした。作家としての責任がかかっていたのです。この点については、1764年、ジュネーヴの混乱に際して自らの役割を正当化した書物、『山からの手紙』において、多くの紙面を割いて実に雄弁に展開しています。ルソーは『社会契約論』が断罪された以上、自分に対して告訴するよう求めています。彼はこう書いています。「自分の義務を知っていて、その義務を果たそうと思う作家が、告白すること、自分の名を名乗ること、責任を持つために姿を現わすこと以外に公衆には何も言わないでいることを余儀なくされていると思うとき、正義が名誉ある人間の不器用さを罪として罰するはずはなく、この作家を別な方法で扱おうとするのです。正義は、作家が自分の名を記すことによって分け

隔てたくはないと主張している以上、書物の主張とその人の主張を分け隔てようとはしません。正義はまず自らに対して責任を持つ作家の言うことに耳を傾けてから、その保証となりうる作品について判断を下すことを望むのです。」ここで明らかにされるのは、書物と作家を分け隔てることの不可能性に基づく、作家の知的責任、刑事的責任に関するきわめて強力な理論です。「この点で、書物と作家との区別はナンセンスなものとなります。書物は処罰できるものではないのですから。」とルソーは主張します。しかし、このような主張は必然的に、作家を公的人物に変貌させることになります。なぜなら、作家は書物を刊行するや、「その責任を取るために姿を現すこと」になるからです。書物の陰に隠れる作家とは異なり、ルソーは過剰に我が身をさらす危険を冒しながら、自ら登場し、自分が作者であることを認め、前面に出てくるのです。

なるほど、ルソーは自分の著作に対する刑事的責任を要求・主張した最初の作家の一人です。しかし、こうした固有名をめぐる駆け引きは、［自分の人生は］真実に捧げられた人生という誇らしげな主張に限定されるのみならず、認められたいという欲望や強烈な自己肯定によるものでもあります。『山からの手紙』の同じ一節では、名誉という語がいたるところに認められます。ルソーは司法官が「自分の名誉を殺して」しまったこと、「死刑執行人の手を介して、自分の名を冠した著作において罪人の烙印を押し」たことを非難しました。彼にとって自分の著作は名誉でした。その著作に署名するのはさらに名誉なことでした。というのも、それは自分の勇気と真正性――この真正性は検閲も含めて公的に証明されることによってしか、意味をなさないものです――を証言するものだったからです。これと同じメカニズムがこれよりも 10 年前、フィロゾーフたちとの決別を示す行為とも言うべき『ダランベールへの手紙』刊行の際、出版業者のジャン＝ミシェル・レイに宛てて以下のように誇らしげに書いた時にも作用していました。「私の名を挙げても良いというだけではありません。私の名は著作のタイトルですらあるのです。」このような誇りに満ちた宣言に、当該著作が引き起こすスキャンダルと作家の名声に対する鋭い意識に基づいた宣伝戦略を認めずにはいら

れません。言い換えれば、ルソーの著名性は大部分、自らの特異性をはっきり示したいという欲望と、比類なき者として認められるべく常に抜きん出ていたいと願う一種の自尊心に基づいているのです。例えば彼は次のように記しています。「凡人と思われるくらいなら、全ての人に忘れ去られた方がいい。」このように、ルソーにおいては自尊心によるものと、文学的・政治的な振る舞い――この振る舞いによってこの作家の人となりは、その著作と常に連動することになります――として現れるものとを区別することが困難なのです。

道徳的模範、自分の著作に対する個人としての責任感、「責任を持つために姿を現そう」という意志に基づくこのようなルソーの態度は、その名や視覚的特徴、そして好奇心や批判、支持の念を掻き立てる特異な振る舞いによってはっきりとその身元を特定できる公的人物を創出するのに貢献しました。公衆は、彼の著作のみならず、その人生、振る舞い、態度、彼が引き起こした論争にまで熱狂したのです。

このような著名性はルソーを喜ばせたはずです。『告白』の中で彼はこうした著名性を追い求めていたと打ち明けています。著名になることを夢見ていたと認めているのです。しかしながら、彼はこの著名性を重荷、呪い、そして疎外として経験するのです。『告白』では、「名声を得るやいなや、もはや友達がいなくなった」と記しています。成功と著名性はルソーに嫉妬に基づく偽りの人間関係を課すのです。こうした人間関係は、批判と［ルソーにとっては］辛い暴露を助長しました。匿名の、しかしヴォルテールが執筆した文書によってルソーが子どもを遺棄したことが明かされたときは特にそうでした。とはいえ、ルソーにとって最も苦痛だったのは、著名性が不健全な好奇心を掻き立てたことです。かくして、賞賛者と野次馬の訪問――これは、著名性の文化に関わる新たな慣行の 1 つです――は、自伝的著作および書簡において繰り返される不満の要因となりました。『告白』においては、あまりにもたくさんの訪問客を受け入れなくてはいけないことが苦痛だと述べています。例えば、フランスとスイスから逃れ、1765 年、スイスに滞在したときには次のように語っています。「これまでに私を訪ねてきた人々は才

能、趣味、生活信条の観点から私と関係性があるとして、それを訪問の理由としていましたし、まずそうした話題から始めて彼らと対話することができました。モティエではもはやそうではありません。フランス側の地域では特にそうです。それは文学への好みなど全く持ち合わせない軍人その他の人々で、その大多数は私の著作を読んだことがなく、彼らの言い分では30、40、60、100リュー［1リューは約4キロメートル］も旅をして私に会いに、英雄、有名人、超有名人、偉人……を崇めに来たというのです。」空疎な話、偽善に満ちた賛辞。こうした訪問は貴重な慰めとなりえたのに、疎ましいものとなりました。訪問客は賞賛の念を示しにやってきたのに、ルソーは彼らが自分を偵察しに来た、あるいは少なくとも自分を馬鹿にして楽しむために来たと思い込んでいたのです。

時とともに、ルソーはこうしたあらゆる形の賞賛の念と好奇心の表明に対する反感を強めていきました。自分と会いたいと思う人々に対してはしばしばきわめて不愉快な返事をし、そうした人々がしつこく迫ると怒り出しました。例えば、ド・ラ・ロッド・ド・サン＝タオン伯爵夫人がルソーのもとを訪ねたいと熱望し、賞賛に満ちた手紙を彼に書き送ったとき、ルソーは次のようにずけずけと答えました。「あなたを喜ばせることができなくて残念ですが、あなたが会いたいと思っていらっしゃる方が私のところに訪ねてこられたことはありません。その方が私の家に住んだことなど一度もないのです。」彼女が執拗に会いたいと求めるのに対し、ルソーは「私に対する最も苛烈な迫害者の封蝋であるかのような、（彼女の）2通の手紙に溢れる大げさで行き過ぎた賞賛の言葉」を非難しました。それから見世物になるのを拒んでこう述べました。「サイを見たいだけの人は、私の家ではなく縁日に行くべきです。このように無礼な好奇心に興趣を添えるあらゆる皮肉は、まさしく侮辱以上のものであり、私から深い敬意を求めることはできません。」ここで触れられているサイとは、サン＝ジェルマンの市で見世物にされ、ヨーロッパ中を回って人々を驚かせたクララを指しています。ルソーは、まさしくその語の意味で好奇心を惹く獣、縁日の見世物になることを拒んでいるのです。

こうした自分自身の著名性についてのルソーの不安はどこまでもついて回るようになり、妄想に近いものになりました。彼の公的な人格は彼自身と読者をさえぎる衝立となりました。つまり、ルソーは著名でありながらも正当に評価されないことを嘆いたのです。ルソーは『告白』の未刊の序文で次のように述べています。「私の同時代人の中には、［……］その名前がヨーロッパで［自分よりも］もっと知られているが、個人としてはもっと知られていない人はほとんどいない。みなが、本人がそれを否定することなどお構いなしに私のことを勝手気ままに思い描いている。上流社交界に一人のルソーがいて、隠居場にはそれとは似ても似つかないようなもう一人のルソーがいる。」これは著名性（「ヨーロッパ中で知られている名前」）と孤独（「隠居場」）を結び付ける重要なテクストです。それは18世紀に登場し始めたメディア世界において「知られている」ということが何を意味しているかという問題を提起しています。ある人についてはその名を知ることもできるし、その人について新聞で読んだ内容を知ることもできますが、その人が実際にどのような人物かを知ることはできません。同じ時期に、ニコラ・シャンフォール［1741–1794］は著名性について逆説的で機知に富んだ、それでいてきわめて本質的な定義を与えています。彼によれば、それは「あなたのことをよく知らない人に知られているという利点」なのです。著名性は単に著名人が彼自身が知らない大勢の無名の人々に知られているという意味で、非対称的というだけではありません。著名人は自分と一度も会ったことがなく、自分について新聞で読んだことしか知らないような人々から知られています。ルソーにとって、それは恐ろしい経験でした。これだけ他者に認められる必要があった彼は、かくして公的イメージを奪われたことに気付いたのです。

著名性についてのこのような告発は、1770年代、『告白』に引き続いて執筆された『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く』という晩年のテクストの1つにおいて頂点に達しました。周知のように、迫害されているという意識は『対話』というタイトルでも知られている本書において最高潮に達しました。そこでルソーは2つに分裂します。というのも、彼は2つの人格――ルソーとあるフランス人――との間のやり取り、すなわちジャン＝ジャックという

誰からも嫌われ、無罪か有罪かを知ることが必要な第三の人物についての議論を想定しているからです。見ての通り、テクストの構成は特に手が込んでいて、そのためこのテクストはルソーの偏執狂的狂気によってもたらされたものと考えられることがしばしばでした。実際には、先の引用が引き合いに出したような分裂をその物語的な極限まで推し進めなければなりませんでした。すなわち、公衆の幻覚の投影である著名人ルソーと、隠居場で暮らす、誰からも知られず、誤解された本人との分裂です。この両者の間にはいかなる類似点もありません。というのも、この公的人物は純粋な虚構だからです。ここで重要なのは、著者が告発している陰謀が公衆のもつ人物像に体現されているということです。公衆は単に少数から成るルソーの敵対集団に騙されているというだけでなく、騙されることを望み、この思想家について語られることをすべて信じ込み、ジャン＝ジャックに関して吹聴されている偽りの、誤ったイメージを喜んで受け入れるのです。ルソーは次のように述べています。「J. J.［ジャン＝ジャック］のことが問題になったとたん、彼について述べ立てられることの中には良識ももっともらしさも入れる必要がなくなってしまうのです。それが非常識でばからしいものであるほど、すぐに疑うべきでないととらえられるようになるのです。」そのとき、万人によるジャン＝ジャックに対する世界的陰謀というテーマは、完全に著名性の影響のメタファーとして読むことが可能になります。というのも、本物ではあるが無名のルソーと、公衆が好んで見入るような、それとはまったく似ても似つかない人物像との間の隔たりを告発しなければならないからです。陰謀はまさしく人物像の歪曲の企てであり、この言葉をルソーは早くも序文において繰り返し用いています。J. J. は「公衆が好き勝手に歪曲し、中傷する人だ」というのです。

この人物像の歪曲ははっきりとした２つの形態――著作の海賊版と肖像版画の発行――をとります。それは著名性の文化に関係する慣行に対応するものですが、ルソーは陰謀の証拠として解釈し、自分はその犠牲になっていると考えました。ルソーにとって、その固有名を奪われることは、「ジャン＝ジャック」という公的人物に単純化されることにつながるだけではありま

せん。彼が辛抱強く築き上げてきた著者としての地位のすべてが脅かされることになるのです。そのせいで彼自身の著作もそれと見分けられない姿になります。「私の著書がどれだけ歪曲されているかご存知でしょうか。[……]それを一掃することはできず、彼らの最も悪意ある解釈でも、彼らが好き勝手にそれを非難するのには不十分であるから、彼らは偽造を企て、この企ては最初はほとんど実現不可能に思われたにもかかわらず、公衆の共謀によって最も実行が容易なものになってしまったのです。」このテクストが示すぞっとするような描写の背後には、18 世紀の書籍商によく見られた慣行が容易に見て取れます。彼らは人気を博した作品の違法な版を進んで出版し、著者の著名性を利用してその名前で出来の悪い著作を堂々と売りさばいていたのです。それは、ド・シュノンソー夫人が、偽物とみられるルソーのオーシュ大司教への書簡を誰かがパリで刊行したと知らせるにあたって、皮肉を交えて彼に述べたように、有名税でした。「これはあなたがまだ得たことのなかった著名性の栄誉です。」ルソーは彼自身の成功の犠牲者ですが、彼は陰謀というモデルに基づいて著名性のメカニズムを解釈しています。つまり、彼の著作を偽造し、それと見分けられないようにし（それを「歪曲」し）、破廉恥な中傷をそれに付け加えて彼を傷つけ、あるいは粗悪な書物を彼のものとみなすことで彼の名誉を傷つけようとしているのです。彼はもはや執筆活動をしていないのに、彼の敵たちは「絶えず彼に本を書きなぐらせ、細心の注意を払って、これらの本――それを書いた文筆家に実にふさわしい内容です――が、その表紙に記された人の名を傷つけることになるよう仕向けるのです。」自分の名前を全面に押し出し、自分の人となりと著作を不可分なものとして結び付けようとするルソーの姿勢は、彼自身にとって不利に働くようになります。彼の責任と名誉とが、こうしたルソーという名前の使用によって同時に愚弄されることになったのです。

それ以来、著名性のもつ矛盾点は作家にとってとりわけ顕著で、苦痛なものになります。固有名はその独自性において個人を指し示すものであり、個人のアイデンティティーとして求められるものであるのみならず、彼の評判、フランス語でいうところの「名声」のようにより公的なものでもあります。

著者としての自分の名前と彼の人格を結び付けたいというルソーの意志は、まるで彼の名前で出版されたテクストが彼の言葉の発現であり、彼の思想や主観性の透明な提示であるかのように、編集者、校正者、書籍商といった多くの介在者、すなわち、商業的戦略が知的な問題と混ざり合うこの書物の世界全体と衝突することになります。ルソーは彼と読者との間にたくさんいるこうした媒介者に直面して、彼の名前が付せられた全てのテクストを自分のものと認めないという極端な解決策をとることになります。1774 年には、今後出版される可能性がある未来の著作は全て自分のものではないとした自筆署名入りの手書きの書簡を流通させるまでに至りました。ルソーは「彼の名前で出版され、あるいは今後出版されるあらゆる新旧の書物は、出版地がどこであれ、偽物であるか、きわめてひどい悪意によって書き換えられ、歪められ、変造されたものであると宣言する。そしてそれらは、もはや自分の著作ではないか、誤って彼のものとされているものなので、自分のものではないと主張する」のです。疑いをかけられるような本の表紙に記された著者名の代わりに、手書きの署名が著者名の保証となっているのです。

ルソーはありもしない真正性を追い求めて袋小路に入り込んでしまったことがわかります。というのは、このような宣言自体、「知らないうちに印刷され」たものであり、おそらくは、彼が懸念していたように、改ざんされたものだからです。ルソーは罠にはまったと感じていました。彼が何をしようとも、それは彼にとって不利に働くのです。彼にはもはや自分の名前の真正性を保つ手段はなく、したがって彼が書いたものと公衆が彼に対して抱く誤ったイメージとを区別することもできません。そこから、ルソーが陥った罠について語るために用いる「網罠」という不変のイメージが生まれました。この言葉は狩猟用の網を指し、獲物が身を守ろうともがくほどしっかりと締め付けられるようになっています。つまり、自分の言葉や行動が繰り返され、解釈される方法を制御できなくなった著名な作家の状況の効果的な比喩になっているのです。自分を正当化し、誰かが自分について言っていることを否定するのでは、さらに世論の思うつぼです。彼に残されているのは、沈黙して何もしないことだけです。彼が記しているように、「まったく何もせず、

提案されることについて一切同意しない」ように努めなければならないのです。見ての通り、彼の行為や言葉の有効性を低下させるはずの著名性は、ルソーがはるかに多くの公衆と関わることを可能にし、彼に不利に働いて沈黙や無為を強いるものです。これは哲学的な著名性の逆説の１つであり、それはまさしく罠だと判明するのです。

ルソーが告発する「公的な人物像の歪曲」の第二の作戦は、公共空間に流通する彼の肖像画、特に複製が作られたアラン・ラムゼーによる有名な肖像画に関するものです。この肖像画は公衆のみならず、例えばそれを書斎の上方に掲げたド・ラ・トゥール夫人のように、ルソーの多くの友人や支持者たちに賞賛されたにもかかわらず、ルソーはこの肖像画は自分を中傷し、あざける意図をもって描かれたと考えていました。彼はとりわけ、そこから制作された複製画を嫌悪していました。この複製画では、暗い印象がいっそう強調されており、非常に人気が出たのですが。1770 年の初めにブレ夫妻の訪問を受けたとき、彼は夫人がアルメニア風の服を着た自分の複製画を持っていることに気付きました。「うちから出て行ってくれ、と激怒したルソーは応じた。私の名誉を傷つけ、品位を下げるために作られた肖像画で、私にとって不名誉となるこんなものを見たり、好んだり、保管したりできるような女性とは会いたくない。そんな女性と昼食を食べるくらいなら、死んだほうがましだ。」彼はこの肖像画をとても嫌っており、それについて『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く』において長々と語るほどでした。その著作で彼は再び次のように不満を漏らしています。「イギリスに J. J. が滞在しているときに、彼自身はこの肖像版画を見ることができないのに、いたるところで複製され、出版され、売られました。フランスに戻ってくると、イギリスで出回っている肖像版画が、版画、とりわけ肖像の傑作として賞賛され、褒めそやされていると知りました。苦労の末にようやくその肖像画を見ることができると、彼は震え上がり、自分の考えを述べました。皆が彼のことをあざ笑いました。」ルソーにとって、この苦痛は全面的なものでした。自分が嫌悪し、醜悪だと思っていた肖像画が出回っているだけでなく、みんなが彼を嘲笑し、問題に気づかないふりをしていたのです。

実際、この肖像画が陰謀の産物だとは思いませんでした。それもそのはずで、ルソーの話を聞いた人々はその肖像画が見事にできていると思ったからです。それがルソーにとってはまさしく謎、文字通り理解不能な謎だったのです。彼が醜く描かれたことで名誉を傷つけられたと考えていた肖像画を同時代人はどうして評価しえたのでしょうか。自分の知らない間に人々の間に広まり、管理することのできない肖像画が存在すること自体、明らかにルソーにとっては試練でした。自分は何よりもまず感受性の強い存在、すぐにほろりとしてしまう優しい心の持ち主であると考えているのに、ラムゼーの肖像画は苦悩する厳格な人物のイメージを彼に割り当てていたのです。この時代の作家の中には他にもその肖像画に自分の姿を認めることができないと感じた人々がいました。例えばディドロは自分を哲学者のようにではなく「年増の浮気女」のように描いたとしてヴァン・ローを非難しています。ヴォルテールは滑稽な姿に描いたとして、ジャン・ユベールを非難しています。実際、18 世紀の作家は公共空間に自分たちの肖像画が流通し、そうした肖像画にいかなるコントロールもできないという事態に直面した最初の人々であることを理解しなくてはなりません。しかし、ルソーにとっては、複製画が広範に広まっており、かつ彼自身が自らの公的イメージという問題に鋭く、研ぎ澄まされた感性を育んでいただけに、このような試練は容赦ないものに思われました。彼の目には、それは策略のなせる業と映りました。ルソーは著名性のメカニズムの背後に自分の「姿を醜くし」、真の面立ちを似ても似つかぬ偽りのイメージで置き換えようという意識的な意図を見抜いたのです。

ラムゼーの描いた肖像画――ここでルソーはうち沈んだ様子をし、アルメニアの衣服を身につけています――にこれほどルソーが不満を抱いたのは、偶然ではありません。多くのルソーの賞賛者たち同様、画家から見ても、この肖像画は、上流社会との決別、奢侈の拒絶、うわべだけの微笑みといった、ルソーの性格の中で最も「真正」と思われる特徴を完璧に表していました。しかし、ルソー自身、それ以降はこの肖像画に一人の公的人物――彼はそれが自分だと認めることを拒絶します――、一種のカリカチュアしか見出せな

いと考えるようになります。彼が考えつき、貫いたような批判的態度を体現する可能性すら、著名性のメカニズムによって損なわれていることを発見します。つまり、この検閲官の厳しさはしかめ面でしか表されなかったのです。実際、「人生を真実のために捧げる」という銘句に要約される批判的参加というルソーの考え方は、パレーシアの系譜、すなわち真実を語ろうとする勇気、率直に語ろうとする勇気――これについては、ミシェル・フーコーが晩年の講義でその論点を明らかにしています――に属するものです。古代ギリシャ・ローマにおけるパレーシアの最も顕著なあり方の１つとして、キュニコス派、とりわけディオゲネスの例が挙げられます。というのもディオゲネスは、社会的慣習の人為的性格を断罪すべく、「真実のスキャンダル」を直接的かつ激しい調子で暴露する点で、その学説が彼自身の行動に完全に内在化されている哲学者だからです。ポリスのさなかで倫理的異端派の権化を演じながら、ディオゲネスは過剰な礼節を行動を通して断罪する者になろうとしました。ルソーが同時代人――彼の敵であれ、賞賛者であれ――からディオゲネスになぞらえられることが多かったのも驚くにはあたりません。そもそも彼自身、はっきりとこの哲学者と同一視することはないものの、その著作の中に、明示的ではないとはいえディオゲネスへの言及を織り交ぜています。特に、ディオゲネスが彼の目には同時代人たちがすっかり誇りを失ってしまったように見えることを示すために、ランタンを手に発言した「私は人間を探している」というかの有名な一文を援用しているのはその一例です。

しかしながら、ルソーが獲得した著名性は彼の誠実さに対する疑いを投げかけることになりました。そしてルソーがディオゲネスと比較されるとき、それは彼が模倣者、すなわち偽のディオゲネスでしかないという嫌疑をかけるためであることが多かったのです。「ディオゲネスの猿真似をする者よ、自らを断罪せよ！」とヴォルテールは彼が所持していた『人間不平等起源論』の余白に激昂して書き記しています。ちょうどルソーが「自分が話題になるのを熱望すること」そして「他に抜きん出ることに必死になること」を批判している一節の傍にです。こうした批判はヴォルテールやルソーがキュ

ニコス派として振る舞い、偽善的な役割を演じているのではないかと疑う人々によってたびたび繰り返されました。より一般的には、ルソーの敵は彼がことさらに目立とうとし、関心を惹くために変わったことをしようとばかりしていると絶えず非難しました。例えば、ド・ショワズール公爵夫人は「自分の著名性を高めてくれると思ったなら、その品位を下げるのではなく、死刑台へと導くような犯罪を彼がわざと犯したとしても驚きはしません。」と書き記しています。

このような批判に対して、ルソーは自己弁護を余儀なくされました。彼は、自分が写譜をするという選択をしたのは「お歴々が言うように、エピクテトスやディオゲネスのように振る舞うべく質素で貧しいふり」をしているわけではないと反論します。まず、著名であるにもかかわらず、彼はいつも同じようであり続けたのだと主張する必要がありました。彼は次のように記しています。「ヨーロッパ中で既に有名で広く知られた名を持ちながらも、私は素朴な当初の好みを保持していました。」さらに加えて、この素朴さ自体、演じられたものではなく、その真正性はうわべだけのものではなく、いわば正真正銘真正なものであると主張する必要もありました。

これは困難な作業でした。というのもルソーは自分の立場の両義性をよくわかっていたからです。彼はパレーシア、すなわち自分の真正性と誠実さを公にすることが18世紀のメディア化された世界では両義的であることを発見しました。彼の特異性は公衆の好奇心、さらには熱狂を掻き立てましたが、公衆はもはや支持者ではありませんでした。公衆はむしろ脅威として立ち現れたのです。というのも、ジャン＝ジャックを公的人物、彼の理解できないフィクションにしてしまったからです。何をしようとも、著名性の論理はあまりにも強力でした。質素に生活したいというルソーの願望ですら、不可能だと判明しました。「そのとき私は、貧しく、独立していることが人々が想像するほど楽ではないと感じました。私は自分の仕事で食べていきたいと思ったのですが、人々はそうはさせませんでした。」

何人もの哲学史家がルソーは真正性、すなわち自分自身でありたいという願望、他人の眼差しに依存したくはないという願望の近代的理想の考案者で

あるとみなしています。この意味では、彼は孤独のうちに開花するロマン主義的主観性の先駆者と言えるでしょう。しかし事はもっと複雑です。ルソーは真正性は常に二次的なのものだと発見したからです。真正性は媒介と公的イメージの増幅に対する反応なのですが、矛盾をはらんでもいます。なぜなら、他者から真正なものとして認められることを求めているからです。ルソーはたえず読者に自分の道徳的無実、確固たる特異性、世論に対する軽蔑の念を認めて欲しいと願いますが、そうしながらも精神的露出狂ではないかとの疑いを抱かせ、自分自身の幸福は公衆から自分の宣言する真正性を認められることにかかっていると考えるのです。

こうした矛盾は公衆からますます激しく批判されることになりました。しかしながら、ルソーは彼が忌み嫌っている小さな文学サークル、社交界のサークルや、文芸共和国やサロン、アカデミーの社交に反対する際の支持者を読者の中に求めることから始めていました。しかし、著名性の結果に直面すると、彼は公衆が自分の不幸の原因であるとして非難しました。当初は、彼の敵が世論を欺くことを可能にしたごまかしのメカニズムに批判が向けられていました。「強圧的手段によって、権力によって、世論によって公衆を導く人々が密かな陰謀――公衆はその秘密を見抜く状況にはありません――によって公衆を騙すことで意見の一致をみたとき、この公衆が全く騙されないなどということがありえましょうか。」しかしほどなくして、公衆自身が進んで騙されるようになるのです。「公衆は騙されています。それはよくわかっています。しかし彼らは進んで騙されているのであって、迷いから覚めることを望んでいないようです。」

魅惑され、また魅惑されることに満足し、偽りのイメージの増加に奇妙で歪んだ満足感を見出す公衆の軽信というこの主題は、中心的主題となり、そこに著名性のメカニズムの解説を読み取らずにはいられません。著名人が問題となる場合、公衆は「すべてを信じることしか求めず」、最もありえない噂を進んで受け入れるのです。著名人をめぐる公開性は、公共空間の非批判的側面、啓蒙の闇の部分なのです。

おわかりのように、しばしばルソーの妄想症（パラノイア）と呼ばれるも

の、すなわち全世界が陰謀をたくらんでいるという確信は、著名性の経験、万人の眼差しと、あらゆる話題が自分に集中するという経験に対する作家の歪んだ見解です。この時から、著名性は不幸と結び付けられるようになりました。著名性から名誉を得、認知されることを期待していたのに、絶えず自分のカリカチュアに直面し、絶えず自己弁護し、自らの真正性を主張しなくてはならなくなるのです。かくしてルソはー自分自身について次のように語ることが可能になったのです。「著名性に伴う特権の代わりに、ジャン＝ジャックの著名性には侮辱、悪口雑言、逆境と中傷しか見出さなかったのです。」

著名性についての苦痛に満ちた報告についてはいくつもの解釈ができます。まずは心理学的解釈ができます。それはルソーの専門家がしばしば行ってきたことです。その場合、ルソーは偏執狂であったとか、あるいは少なくとも迫害妄想に苛まれていたのだとか、同時代人と正常で穏やかな関係を結ぶことができなかったのだとされます。しかし、こうした解釈は私には不十分であるように思われます。たとえ、ルソーが希求した透明性の主題を通してスタロバンスキーが行ったような重要な文学研究のレヴェルにまで水準を高めたとしても、です。

次に、より歴史的な解釈、さらには社会学的な解釈もできます。それが今日の講演、そして『セレブの誕生』で私が試みたことです。ルソーは模範的であると同時に過剰なやり方で、文学的名声の形態の変容から生じる影響を、それを初めて経験した者の一人として語りました。文学独自の強みは、まだ当時は発生したばかりではあったけれども、それ以降、はるかに重要性を帯びていった現象に、様式化された、ほとんど幻覚のような形を与えることにあります。ところで、ルソーが語ったこと――つまり好奇心、さらには公衆の愛着の念が個人に与える暴力、自らの公的イメージを管理する難しさ、一切の安らぎは失われているという感覚、さらには自分の姿が歪曲されているという感覚――こうした要素はのちの時代も語られ、著名人の生活の重要な要素となったのです。20 世紀には、どれほどの映画やショー・ビジネスの

スターたちが、最終的に精神的に衰弱し、孤独に陥ったことでしょう。ご存知の通り、自殺した人々もいます。著名性と不幸を結びつけながら、ルソーは近代のメディア革命に対する診断を、まさしくその初期段階において下したのです。彼は、公開性は多くの同時代人が考えたような解放する力ではなく、同時に憂慮すべき脅威でもあるということを知ったのです。

最後に、政治的な解釈もできます。というのも、著名性についてのルソーの考察は、近代社会におけるパレーシア的態度の不可能性、したがって批評の限界についての悲観的な結論に至ったからです。ルソーは気晴らしを求めている公衆の見世物になることによってしか、王族の慰み者になることから逃れられなかったのでしょうか。模範的生活を公に示すことがもはや社会批判の武器にはならず、好奇心の対象、そして公開性の論拠となるのであれば、不正に憤る真正の思想家と著名性を求める日和見主義者をどのように区別すればよいでしょうか。ルソーを沈黙させるのは、彼の大いなる苦悩です。啓蒙の時代のあらゆる哲学者同様、彼は真実のために生き、そして亡くなったソクラテスのイメージに魅了されていました。したがって、その誠実さを証明するために、そしてその言葉に政治的な力を与えるために死ななくてはいけなかったのです。ある驚くべき一節で、ルソーは次のように記しています。「もしソクラテスがベッドで亡くなっていたとしたら、私たちは彼が抜け目のないソフィストでしかないと考えたことでしょう。」哲学者の生活がその思想について判断する基準であるとしたら、その生活がジャーナリスト、広告業者、中傷者によって公衆にさらされるとき、その思想は道徳的・政治的効力を保持し得るのでしょうか。

かくして賞賛され、熱狂的に愛されているにもかかわらず、万人から憎まれているという確信に固執している作家の矛盾を理解することができます。ルソー主義の特異性は読者と作家の間に形成される感情的共同体にではなく、作家がその感情的共同体を最終的に全力で放棄したこと――彼自身強く望んだことですが――にあります。こうした好奇心の対象、見世物になる際の苦悩、常にその真正性を主張しようとする配慮は、絶えず決裂を増やしたとし

ても、もちろん、ルソー自身の人となり、その気質、文学的想像力に関連付けられます。しかし、私がここで皆さんに示そうとしたのは、著名性の文化が文学的生活の中に導入しようとしていた大規模な変容を、ルソーが大変な厳しさと誇張を通して認識し、語ろうとしていたということです。ルソーは進行中のメディア革命が個人のアイデンティティの形態そのものを大幅に変容させようとしており、著名性が作家にとっての罠へと変容し、作家を公衆の期待に合わせざるを得なくしたことを理解する必要があります。ルソーが晩年、雄弁に物語った孤独への欲望はまた、その公的イメージの抗い難い拡散への回答でもあるのです。

（訳　井上　櫻子）

付記：この講演会は、公益財団法人 2019 年度日仏学者交換プログラム、慶應義塾大学小泉基金、平成 31 年度・令和元年度文部科学省科学研究費・基盤研究（C）（課題番号 17K02601）の助成を受けたものである。